

令和3年度第1回練馬区在宅療養推進協議会認知症専門部会会議要録

- 1 日時 令和3年7月12日(月) 午後6時30分～7時45分
- 2 開催方法 Web会議システムによるオンライン開催
- 3 出席者 <委員>
古田委員、石黒委員、田邊委員、塚本委員、斎藤委員、鈴木委員、鵜浦委員、
油山委員、志寒委員、結城委員、池寄委員、関口委員
吉岡委員(高齢施策担当部長:部会長)、屋澤委員(高齢者支援課長)、平川委員(高齢社会対策課長)、風間委員(介護保険課長)、高橋委員(地域医療課長)
<事務局>
高齢者支援課
- 4 公開の可否 オンライン会議のため公開なし
- 5 次第
 - 1 開会
 - 2 令和2年度練馬区在宅療養推進事業実施結果について
 - 3 令和3年度在宅療養推進事業スケジュールについて
 - 4 認知症ガイドブック(令和3年度)について
 - 5 認知症サポーターカードについて
 - 6 チームオレンジの取組みについて
 - 7 「わが家で生きる」の周知啓発について
 - 8 もの忘れ検診の広報(受診促進)について
- 6 資料
 - 資料1 令和2年度練馬区在宅療養推進事業実施結果
 - 資料2 - 1 令和3年度練馬区在宅療養推進事業スケジュール
 - 資料2 - 2 介護家族等への支援
 - 資料3 認知症ガイドブック(令和3年度)について
 - 資料4 認知症サポーターカードについて
 - 資料5 チームオレンジの取組みについて
 - 資料6 「わが家で生きる」の周知啓発について
 - 資料7 もの忘れ検診の広報(受診促進)について
 - 参考1 練馬区在宅療養推進事業(令和3年度～5年度)
 - 参考2 練馬区医師会医療連携・在宅医療サポートセンターの案内
- 7 事務局 練馬区高齢施策担当部高齢者支援課在宅介護支援係
電話 03-5984-4597

8 会議の概要

(部会長)

【挨拶】

(事務局)

【出席確認、資料確認】

(部会長)

次第1報告(1)資料1 令和2年度練馬区在宅療養推進事業実施結果について報告を。

(事務局)

【資料1】について説明。

(部会長)

本件について質問、意見等はいかがか。

(部会長)

令和2年度は新型コロナウイルスの影響を大きく受け、地域包括支援センターの相談件数が増加しているという報告があったが、相談の内容と新型コロナウイルスとの関連についていかがか。

(委員)

新型コロナウイルス感染症に関連した認知症相談については、外出機会が減り、運動不足やもの忘れの進行が気になる等の相談が、御本人およびご家族の方から寄せられていた。

(部会長)

本件について他に質問、意見等はいかがか。

(委員)

資料1の色分けの見方について確認したい。

(事務局)

資料1は在宅療養推進事業全体をまとめた表だが、認知症専門部会に関わりの大きい部分を白く他を網掛けにして色分けをしている。

(部会長)

次第1報告(2)令和3年度練馬区在宅療養推進事業スケジュールについて説明を。

(事務局)

【資料2-1】 【資料2-2】について説明。

(部会長)

昨年度からの変更があった事業に携わっている委員から内容についてご紹介いただきたい。介護学べるサロンについていかがか。

(委員)

事業所として既に3回開催している。1回目はデリソフターという介護食品をそのまま柔らかくする電気圧力鍋の実践とコロナで問題になっている低栄養について。2回目は東京都が発行した私の思い出手帳というACPのガイドブックを使ってそれを書き込むという形のセミナー。3回目は2回目の内容に加えて、もしバナゲームというゲームで体験するアドバンスケアプランニングを開催した。

どの回も人数を絞っての開催となり、10人未満中の参加者であったが、その分ゆっくりと皆さんお互いにお話ができ、とても和やかな雰囲気であった。平日夜の開催ということで、仕事をされている方等も参加されているのが目新しい部分である。

介護学べるサロンになってからの感想としては小規模でじっくりと話ができる、深い悩みを抱えてここまで来た方とお話する時間が増えてとても良い。小規模で、サロンという名前のため、仕事帰りや病院の通院帰り、あるいは買い物ついでに寄ってみたという形になっていければ良い。本日は、バーチャル背景で介護学べるサロンののぼりを作ってきたが、色々なところにこのサロンののぼりを出して、地域の繋がりを作りたい。このコロナで地域力自体が落ちている。地域力があっての地域包括ケアである。例えば他委員の事業所は町会との繋がりが強いが、私達介護事業所のなかには地域と結びつきが弱い事業所もある。事業所側としての地域学べるサロンもあつたら良いという印象を受けた。

(部会長)

他に質問、意見等はいかがか。

(部会長)

次第1報告(3)認知症ガイドブックについて、事務局から説明を。

(事務局)

【資料3】について説明。

(部会長)

本件について、質問、意見等はいかがか。

(部会長)

次第1報告(4)認知症サポーターカードについて説明を。

(事務局)

【資料4】について説明。

(部会長)

オレンジリングをお持ちの方でご希望の方はカードを受け取ることはできるということで良いか。

(事務局)

オレンジリングをお持ちの方でカードが欲しいという方には申し出により配布している。

(部会長)

本件について、質問、意見等はいかがか。

(委員)

当病院では認知症治療病棟の担当職員は全員受講し、職員証にオレンジリングをつけて仕事をしている。また、それを院内学会で発表したところ、老人保健施設の職員も全員受講し、オレンジリングをつけている。オレンジリングを持っていることが、認知症病棟で働くスタッフおよび老健で働くスタッフの証になり、ご家族からも非常に反応が良い。オレンジリングの無料配布が終了することは非常に残念である。カードはネームカードの裏に入れて使用できるが、リングのほうが目立つ。しばらくは購入ができるということだが、リングをカードにかえるだけでなく、カードをリングにかえることもできると良いと思う。

一方で、カードは裏面に認知症への接し方の「3つのない」や「7つのポイント」が印刷されているので、持っている人が普段認知症のひとへの接し方を振り返るには、身近に持っていて使える資料としては有難いものだと感じている。

(事務局)

今年度はカードの配付をしている。オレンジリングは1個100円として購入の案内をしており、有料であるが継続はしている。購入をご希望の場合は相談いただきたい。今後の対応は皆様のご要望をお伺いしながら、検討したい。

(部会長)

それぞれの良さがあると捉えている。今年度はカードを使っていたきながら、リングについてのご意見等もいただきたい。

(部会長)

次第1報告(5)チームオレンジの取組みについて説明を。

(事務局)

【資料5】について説明。

(部会長)

本件について、質問、意見、感想等はいかがか。

(委員)

チームオレンジという形で行っていくことに対してお願いしたいことがある。お困りごとを解決するというスタンスではなく、認知症のご本人がしたいこと、生活の幅を広げたり、楽しみにすることをサポートする良い形になっていくことがある。

例えば認知症の記憶障害で約束事を忘れるためにずっと通っていたカラオケサークルに行けなくなった人には、ほかの人に付き添ってもらってサークルに行けばいいとか、そうしないとどうしてもお困りごと解決になってしまい、本来の認知症のご本人の生活の幅を広げるというイメージから遠ざかってしまう。もう一つは何か事例とか実践ができれば良い。

板橋区の例として、若年性認知症の本人が料理が得意で、ある居酒屋をお借りして、そこで自分で料理を作って皆さんに振舞い、参加した人はちゃんとその料理に対してお金を支払っている。

ご本人も記憶障害もあって難しい部分はあるが、それを上回るぐらいの本人の力が引き出せている。

さらにそういった実践が、若年性認知症のあの人が料理してこういうことやってるならば、若年性認知症の別の人も連れていきたい。もう1人そこで料理してもらいたい人がいますという感じで、実践が実践をよんでいくので、ぜひそういった形を目指していただきたい。

(部会長)

実践が実践につながることはその通りだと感じている。

(部会長)

医師の立場から認知症本人に関わるなかで、本人発信の促進についていかがか。

(委員)

コロナ禍で、集まることのハードルが上がってるかもしれないが、オンラインでやるのが厳しい方もいるので、感染対策をして本人ミーティング続けている。感染を抑えるのも大切だが、感染対策をしながら行える方法論を考えていただきたい。

(部会長)

コロナ禍ならではの皆様の参加ができるような方法を講じていけたらと考えている。

(部会長)

認知症サポーターの養成講座講師として関わるなかで、サポーターへの働きかけなどについていかがか。

(委員)

サポーター養成講座の際にチームオレンジの紹介をした画面で、とても興味を持って質問をしてくださった方がいた。美容師をされているということだったが組合としてチームで参加するのでは

なく、引きこもりでどこにも行かれないような方に、個別で訪問して、美容や綺麗でいるという気持ちをずっと忘れないでいていただけるような関わりが持ちたいということで、サポーター養成講座にも参加されたとのこと。どのような形で、個別の関わりができるのかなということをお悩まれていたが、チームオレンジのような活動があるのであれば、今後積極的に参加をしていきたいということで、お住まいの地域包括支援センターにすぐ問い合わせをしてくださったと聞いている。今は始まったばかりで、サポーターにお願いする具体的な活動はこれからという段階だったため、また追々参加していきたいというご希望や、お気持ちを報告いただいた。今後そういった支援には一緒に参加ができれば良いと思っている。

(部会長)

チームオレンジはこれから進めていく取組みである。皆様の活動や実践をのお知らせいただき、広がっていくことを期待している。今後ともご協力をお願いしたい。

(部会長)

次第1報告(6)わが家で生きるの周知啓発について説明を。

(事務局)

【資料6】について説明

(部会長)

本件について、質問、意見、感想等はいかがか。

(部会長)

次第2議題(1)もの忘れ検診の周知啓発について説明を。

(事務局)

【資料7】について説明

(部会長)

本件について、さまざまな立場からご意見等を伺いたい。

(部会長)

区とともに検討する医師会の立場からご意見はかがか。

(委員)

区の医師会の先生方とすでに検診を行う医師の研修会を行い、今は医師向けのガイドブックを作成している。検診は積極的に受けてほしいが、どのように宣伝していくかというのは検討が必要である。区としては今までに認知症検診について広報しているか。

(委員)

毎年4月発行する区報で、区の検診の記事を掲載しており、その中に、今年度も忘れ検診が始まることを載せている。続いて5月の区報の介護保険の特集号の中で、も忘れ検診が10月に始まることを載せて広報している。

(委員)

他区の事例はいかがか。

(委員)

他区の事例に参考になるものがあるか今後確認をする。

(委員)

検診を実施する側の立場だけで考えるとピントがずれることがあるので、他委員の意見も聞きたい。例えば、認知症の講演会やケアカフェなどの具体的に高齢者が集まるような会で、チェックリストを实际やってみる機会をもつことも良いのではないか。興味のある人たちだけが対象になる懸念があるため、大丈夫だと思ってるにチェックリストをやってみようという気持ちにさせていくかについては、様々な方の意見を聞くのが良いのではないか。

(部会長)

地域のかかりつけ医の立場からご意見はいかがか。

(委員)

問題点がいくつかあるとすると、認知症に対する偏見というか、自分が認知症だと言う人はあまりいないことだ。私見だが、周囲の方がおかしいと思ってご相談に来られるというケースが多く、自分で自分がおかしいと言って来られる方はかなり少ない。自分で自分がおかしいので物忘れ検診を受けたいと、動機づけする方は非常に少ないのでは。むしろ家族がみて、少しおかしいから受けた方がいいのではないかと、誰か誘導する人がいないと検診に繋がらないのではという懸念はある。

(部会長)

民生委員の立場で様々な形で高齢者の方や家族の方に対応される中でご意見等はいかがか。

(委員)

認知症の方を発見して、地域包括支援センターに繋がった際に、やはり、ご自分では認知症と思わないため、どのように対処していいか、非常に困ったことがある。

(部会長)

ご本人はもとよりご家族や地域の方々、誰かが気づく体制が大事である。その意味でも啓発は重

要なためご協力をお願いしたい。

他にご意見等はいかがか。

(委員)

当病院でもの忘れ外来をやっているが、やはり自分で不安だから受けたいと言ってくるケースは多くない。月に16件ほど年間200名ほどの方が相談に来る中で、不安が大きいと、いろいろ検査を受けてみたいという方はおそらく1割に満たない。しかし機会があることが重要であり、無料で検診が受けられるというのは非常にありがたいこととして使っていただきたい。あと、周囲の方たちが、あなたは認知症だからなどと言ってしまうのは本人に対して難しいところある。検査を受けてみて大丈夫だったらそれでいいじゃないというような促しで、繋がるチャンスがある。本人が不安のとき受けるのはもちろん、周りの人たちが気づいたときに、次に繋がる可能性があるという意味で非常にありがたい制度だと思う。ぜひうまく進めていただきたい。

(委員)

訪問看護で訪問をしていると配偶者の方が認知症だろうというケースが結構多いのだが、ご家族も認められてないとその方を誰にどのように相談したらいいのかもわからない。ケアマネジャーも同様で、困っているケースが数件ある。さきほどの意見のように、何でもなかったらいいじゃないというように促しながら関わっていくのもとてもいいことだと思う。

地域包括支援センターに繋げる際など、個人情報の問題や、ご家族があまり理解していない場合は難しいため、今後の課題かと思うが、検診があることをこちらもお伝えしていくことがとても大事なことだと考えている。

(委員)

繋がるきっかけとしての検診が有効になれば良いと思っているが、実際にチェックされることは非常に心理的ストレスがかかる。認知機能チェックされて、丸一日せん妄状態に落ちた例がある。例えば、誰しも目の前で体重計に乗ってくださいって言われたら、とても嫌だとは思いますが、それ以上の恐怖とか不安とか怖さを常に、特に自分が認知症かもしれないと思っている人は、自覚がないわけではなく、何か不安だ不安だと思っているので、そこでチェックされるというのは相当ストレスがかかるものだ。偏見や誤解がすごくあるのであれば、例えば、それを解くような講演会と一緒にいこうとか、あとは実際に早期発見早期対応してよかったという事例のエピソードを話す機会のときに検診をすすめる等の方法でないと、素直に受け入れてもらえないのではないかと。

(部会長)

多くのご意見をありがとうございました。検診があっても受けていただき、皆さんの不安の解消に繋がらなければ何にもならないため、取り組みの工夫をしながら、安心して生活していただくことが大事だと考えている。またご意見等ありましたらお寄せいただきたい。

(部会長)

次第3 その他について説明を。

(事務局)

次回日程について説明。

(部会長)

【挨拶】

閉会